

Title	蔵役人福沢百助をめぐる大坂文壇
Sub Title	Fukuzawa Hyakusuke and a literary circle in Osaka
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.40, (1980. 9) ,p.90- 108
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集・文学と都市
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00400001-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

蔵役人福沢百助をめぐる大坂文壇

佐藤一郎

(一) 福沢家・慶応義塾と大阪

福沢諭吉は蔵役人福沢百助（一七九二～一八三六）の次男として天保五年（一八三五）、大坂中津藩蔵屋敷で生れたが、天保七年六月父が急逝したため、母阿順、一兄三姉とともに豊前中津に戻っている。しかし安政二年（一八五五）ふたたび大坂へ出て緒方洪庵の適塾に入門してから安政五年（一八五八）まで、ほぼ一貫して大坂で蘭学の勉強をつづけた。

福沢家と大坂との関係はこれだけではない。父の百助はその生涯の活動期のほとんどすべてを蔵役人として大坂に過し、河北展生氏の研究によれば、天保六年には上士の職である御留守居代を勤めあげている。また兄の三之助も数年間蔵役人の任にあった。福沢家と大坂との関係は、まことに因縁浅からざるものがあるといわなければならない。

さらに明治以降、学問と文学の分野に限定して考えてみても、慶応義塾の教授には『大阪市史』八巻の編集主任の幸田成友、池田弥三郎名誉教授の師である折口信夫、また『大阪』『大阪の宿』の作者水上瀧太郎がある。

今日の大阪を考えるには阪急の小林一三、商工会議所会頭の杉道助（吉田松陰とおなじく杉家の出）などの名を逸するわけにはいかない。大阪の町を歩いていると、さらにこれらの人びとと交渉のあった多くの学者・文人の遺跡があり、大阪の文化伝統について反省する契機ともなっているのである。

(二)、武士と町人

江戸時代の大阪は、日本第一の商業都市であった。堺の自由市の気風を継承する町人の町である。京都には天皇がおり、江戸には將軍がいたが、大阪には松平忠明（奥平信昌の四男）以降城主はなく、五〜六万石程度の譜代大名から城代が、一〜二万石程度の譜代大名から京橋口定番と玉造口定番が、三〜四万石程度の譜代大名から山里加番、一〜二万石程度のおなじく譜代大名から中小屋加番・青屋口加番・雁木坂加番が選ばれ、旗本から大番が十組から十二組、千石〜三千石程度の旗本から町奉行が二人選ばれ交替で行政に当たただけであった。大番には与力・同心が付属し、町奉行にも与力・同心が付属する。

陽明学者で天保八年（一八三七）の大塩平八郎の乱の中齋は、大坂町奉行与力で二百石取りの地役人である。いまま造幣局構内に同格の与力屋敷の表門が残るが、諸藩の武士の二百石取りの上士の門構えとは比較にならないほど豪壮で、地位はともかく経済的にはかなり余裕のあったものと推測される。

武士は以上のほか諸藩の蔵屋敷の蔵役人がいるが、町人層に対する比重は数の上でも權威の上でも低く、大坂三郷は惣年寄以下町年寄たちの自治に委ねられていた。

かつて幸田成友の下に都市研究史上の名著『大阪市史』の編集に当られた宮本又次氏は、現在の大阪研究を代表する

学者である。氏は「大阪風と江戸好み」(『大阪今昔』町と人)所収)のなかで次のように述べている。

「蔵屋敷の武士である御留守居役は年頭の挨拶にに両替屋へ槍・はさみ箱を持たせた若党仲間をつれて礼にいった。そのあとで両替屋の方から蔵屋敷の方へ回礼にいく習慣であった」とあり、さらに「幕末の大阪では大阪城の中へ、二の丸にさえも見物人がはいつて見物できるということは、よほど平民的な都市であり、町人の力が強かった町といえよう」といい、「天保十四年に(大阪城の)第四回目の大修繕をしたが、その時は大阪の町人に献金百五十五万五百両を命じている。町人の富力で城を復旧した例は他では少ないであろう」と続ける。

この大坂へ各藩では競って有能の士を派遣した。江戸時代も降るにつれて戦鬪警備役の番方よりも、行政官・外交官・財務官の役方の地位が向上した。「藩当局も大阪蔵屋敷の留守居には常に有為なる人材をもって任じ、藩政府はこれを遇すること甚だ厚かったのである」(宮本又次氏「大阪の蔵屋敷と蔵役人」『大阪の研究』第三卷所収)。

留守居は蔵役人の長であり、一藩を代表する外交官であり、財務官である。蔵屋敷の個別研究には、黒羽兵治郎氏の「加賀藩の蔵屋敷制度」(『近世の大阪』所収)、宮本又次氏の「佐賀藩蔵屋敷の史料紹介」などがあって、いくつかの藩についてはその詳細が判明しているが、豊臣氏以降、大坂冬の陣・夏の陣で廃墟と化した大坂の復興に最大の功績がある松平忠明ゆかりの中津藩については、さしたる文献が残っていない。幸いにして福沢本家より慶応義塾に寄贈された福沢百助の『杲育堂詩稿』、『露芳閣文章稿』があり、中津藩蔵屋敷の廻米方としての日常生活とその学問・文学を今日に伝えている。その全容については『史学』(三田史学会)に連載中の訳注によって承知されたい。

なお蔵屋敷の遺構としては、天王寺公園の大阪市立美術館裏門として、中之島より移築した旧黒田藩屋敷長屋門がある。江戸の大名屋敷の門とは造りを異にし、門それ自体が巨大な蔵造りである。

(三)、藏役人の学問と文学

最初に『大阪名家著述目録』（大阪府立図書館・大正三年刊）によって、藏役人関係の経歴・業績を概観しておこう。奥野小山 名純、通称弥太郎、生寛政十二年、歿安政五年八月二十日、年五十九。世々瓦町に住す。幼より学を好み、業を篠崎小竹に受け、秋里・香坡・竹陰と共に四天王の称あり。旁ら画及び能楽を善くす。三上藩（遠藤氏）に仕へ大阪邸守たり。

落合雙石 名賡、字子載、通称敬助、号雙石、生天明八年、歿明治四年、年八十四。日向の人、飢肥藩の儒員、大阪藩邸監として滞留し、終に此地に歿す。

河野恕齋 名子龍、字伯潜、通称忠右衛門、号恕齋・鶴阜・南濱、生享保三年、歿安永八年二月九日、年三十七。岡白駒の長子、本姓に復す。生れて穎悟、十歳詩を能くし、神童の称あり。夙に家学を受け、経史百家より稗官小説に至るまで該通せざるなく、尤も文章に長ず。知を蓮池侯（鍋島支藩）に得、大阪藩邸の留守職となる。

萱野錢塘 名來章、字君譽、通称司馬太、号錢塘、生享保十四年、歿天明年十月二十六日、年五十三。熊本藩士にして考澗の子、父に継ぎて大阪藩邸守となり、四方の碩学を聘し、邸内青菺館に於て経を講ぜしめ、邸中の子弟をして聴受せしむ。性冲虚謙退にして賢を尊び士に下り、交遊日に広く、府下藝苑の会必ず與かる。

黒沢翁滿 名重禮、字翁滿、通称八右衛門、号菴居、生寛政七年、歿安政六年四月二十九日、年六十五。武州忍の藩士、人と為り温厚学を好み、鈴屋門に入りて古学を修す。既にして契沖・真淵の偉業を思ひ、斯学の發揮を以て自から任ず。嘗て君命を以て大阪藏屋敷の吏となり、留ること十数年。

西田直養 字浩然、通称庄三郎、号篠舎・柳村。歿文久三年五月、年七十餘。豊前小倉藩士、曾て大阪藩邸の監として此地に在り、會長藩外国と砲火を交へし際、小倉藩論佐幕に傾き、敢て勅を奉じて長藩を援けず。直養大に独り自ら憤り食を絶て死す。

以上のうち、奥野・落合・河野・萱野の四人は漢学者であり、黒沢・西田の二人は国学者である。これに漢学の橋本香坡も当然加えなければならぬが、『大阪名家著述目録』に蔵屋敷関係の記事が落ちているので、「大阪の漢学」(『毎日放送文化双書』所収)中の北村学氏の叙述によって補うと、「一八〇九〜一八六五、享年五十七)篠門四天王の一人。名は通、学は大路、別号は静庵・毛山。額が突き出たので戯れて、戴盆子・程方珍ともいった。幼名は圭太郎、通称は半助。上野沼田藩士橋本紋左衛門(名は一徳、号は担翁)の子として、文化六年(一八〇九)に生まれ、十五歳、父母と共に大阪蔵屋敷に移り、小竹の門に入った。三十一歳、近衛家の招きで伊丹明倫堂をあずかり、後、金本摩斎に譲り、四十九歳、九州地方を遊歴した。『西遊詩稿』にその詩が集められている」。

また最近になって出版された『浪華混沌詩社集』近世芸芸叢刊8 昭和四十四年十一月刊)影印版に、岡田南山著、頼春水序の『半間園遺稿』がある。同書の解題によると、「岡田南山、名武豹、字君章・善次と称す。南山のほか静所・寧斎・古処・墨樵などの号がある。阿波藩大阪蔵屋敷に勤務していた武雅(寛政三年八月二三日歿、七四歳)の次男として、寛保二年十月十八日に生れ、兄武彪歿後、南山も邸吏として出仕した。少時より片山北海に学ぶ。多才多芸で、詩や書を嗜むばかりでなく篆刻、丹青(頼春風『春風館詩鈔』、秋元時憲『小丘園集』などに題賛あり)みな功みで、射劍の術に達し、糸竹にも勘能であった。……竹山『奠陰集』にも南山への送別詩がある。

さらに『混沌詩社先賢遺墨観誌』(大阪史談会刊 昭和二年)の「混沌社先賢小傳」中に、大畠赤水があり、「名九

齡、字寿王、通称大畠官兵衛、赤水と号し、自ら平寿王、平九齡と称す播摩の人。明石藩士にして大阪藩邸の留守居役なり。中井竹山に師事し詩文に長ず。竹山常に其詩を称して、梁田蛻巖の遺韻ありとす。其書初め甚た拙劣なりしも、趙陶齋に従遊してより俄然一変して妙手となり、最初に較ぶれば全く別手の觀あり。

以上、関係図書より蔵屋敷勤務の武士の文筆に優れた人物を列挙してみたが、この記述を補う宮本又次氏の論文がある。すなわち前出の「大阪の蔵屋敷と蔵役人」の第四節、「蔵屋敷と人物」のなかに、さらに清水中洲（仙台留守居）、吉田報春亭（広島御船係）、福沢百助を挙げ、蔵屋敷で誕生した有名人に福沢諭吉、慈雲尊者を挙げ、父の蔵屋敷勤務に伴われて大坂に住みついた人として緒方洪庵を挙げる。

「百助は文政五年から天保七年の死に至るまで「商人を料理茶屋に呼んで借金の懇請をしたり、返済延期の言訳をするため、一緒に酒を飲んで、機嫌を取らねばならぬ」（小泉信三『この一年』）元締役として過したが、またその間「忙中閑あり、一方には深く文事に志して学流は堀川の伊藤仁斎・東涯の経義を悦び、特に文章を善くして詩も亦あり、野田笛浦の如きは親友中の一名なりき。左れば君の一身は俗吏なり、経学者なり、又詩文家なり。心事極めて多端、思想極めて広くして一方に偏することなく」（『福翁自傳』・論吉「古銭配分の記」）とある。蔵役人としての福沢百助はまた一面において学者だったのである」。

まことに多士済済、かつての大坂の文運の一端を担っていたのは蔵役人たちであったといえよう。

（四）、懷徳堂・混沌社・梅花社

懷徳堂は町人が起した学校である。一私人の塾ではなく、町人が財政面を共同で支えて学者をもりたててきた点にお

いて、江戸期の幕府や諸藩の学校・私塾などとは根本的に異なる。享保九年（一七二四）十一月、徳川將軍吉宗のとき
に三宅石菴を学主に仰ぎ、中井鶯庵が三星屋武右衛門・道明寺屋（舟橋屋吉左衛門）・舟橋屋四郎右衛門・備前屋吉兵
衛・鴻池屋又四郎の五同志を語らって創立した。享保十一年にはさらに幕府公認の大坂学問所となったが、学校の財政
はこれらの上級町人たちによって維持された。西村天因（時彦）編、松村文海堂、明治四十四年十月刊の『懷徳堂五
種』に収める「享保十一年丙午冬十月五日癸亥浪華学問所懷徳堂開講會徒」は、ほとんど有力町人によって占められて
いるのである。大坂の武士階級、それも地方から出て来た蔵役人たちにとって、かなり勝手の違う思いをしたのも当然
といえよう。會徒として記録されている者は、八十八名、五同志のほか天王寺屋九郎右衛門など町人名前が圧倒的に
多い。

次に懷徳堂の学統であるが、懷徳堂と縁故の深い武内義雄の「懷徳⁽²⁾堂と大阪の儒学」（『武内義雄全集』第十卷 雜著
篇所収）および宮本又次氏の『大阪文化史論』（文献出版 昭和五十四年六月刊）の「懷徳堂と明誠舎と住友」に拠っ
てたどれば、第一代学主三宅石菴の折衷的傾向、ためにヌエ学問の称があった。第二代学主中井鶯庵も朱陸折衷、第三
代三宅春楼、第四代が中井竹山、その弟が履軒である。この竹山・履軒時代がその全盛時代である。竹山・履軒に至
って朱子中心になるが、陸王に対する批評を避け、一家の宋学を目指している。

この竹山には『懷徳堂五種』にも収める詩文集『奠陰集』があり、当時の大坂の代表詩人でもあった。集中に肥後藩
留守居菅錢塘との交際を物語る詩文がある。もちろん反古文辞の主張を持ち、道徳的、経学中心の詩文観を持つが詩文
の価値は認めていた。この側面については松下忠氏の『江戸時代の詩風詩論』（明治書院）に詳しい。宝暦から享和に
至る將軍家治・家斉時代に活躍した。

他方、大坂には混沌(詩)社・梅花社の詩文を以て立つ一派がある。混沌社の盟主は片山北海であり、宝曆より天明に至る約四十年間大坂詩壇の極盛期を築いた。その同人の有力者に阿波藩留守居の岡田南山、肥後藩留守居の菅錢塘がある。北海の師は京都の商人学者の宇野明霞であり徂徠系、北海自身も越後の農家の出身である。その同人には、尾藤二洲、柴野栗山、古賀精里、頼春水・春風・杏坪などの朱子学者があり、あまり門戸の見を表面に出さなかつたらしい。終生諸侯に仕えず、町儒者に徹した。衣笠安喜氏は「儒学における化政ノ寛政異学の禁との関連」(林屋辰三郎編『化政文化の研究』岩波書店刊所収)のなかでいう。「つまり、京坂の徂徠学系明霞門の流れをくむ詩社グループのなかに、明和年間に、拙斎・栗山・春水・二洲・精里らの少壮の朱子学攻究の徒があらわれて、同志的結合を深めるとともに朱子学正学化の道をひそかに準備していた、とみることができよう。……春水らの大坂の小グループが、詩文派の混沌社中であつて朱子学に近づいていった経緯はくわしくは分らない。」北海の寛容をよいことに思想史的には重大な事実が一方では進行していたのである。

その有力な同人に篠崎三島がいる。師は徂徠の弟子の菅谷甘谷であるが、次第にこれまた宋学に傾く。かれは通称伊豫屋長兵衛、大坂町人から四十歳にして儒者に転じた。号は梅花堂、梅花社は三島と養子小竹の詩社である。

そのほかの同人には木村巽斎、号は菴葭堂、通称坪井屋吉右衛門、大通として天下に聞えた豪商である。

(五)、篠崎小竹・中村栗園・野田笛浦および大塩中斎

中村栗園・野田笛浦・大塩中斎はいずれも篠崎小竹と交際のあつた人びとであり、中村栗園は確実に、野田笛浦は予測として福沢百助と交際のあつた人びとである。

まず順序として篠崎小竹（一七八一〜一八五一）から述べることにしよう。小竹の父は豊後の出身で、大坂において医を業とした。小竹は九歳より篠崎三島に師事した。三島はその学才を評価し、養嗣子とした。ところが寛政異学の禁に際し徂徠学の退潮がいちじるしく、小竹は養父に無断で江戸へ出奔し、かつての混沌社の同人古賀精里のもとで勉学に勵む一時期を持った。

しかし精里の忠告もあり半年たらずで養父の家に戻り、以降父に代りて教授し、梅花社を主宰し、大坂文壇の中心となったばかりか、ひろく当時の漢詩人と交際し天下の文壇の大御所的存在であった。それにはかれの性格、財力（儒の鴻池といわれていた）も与って力がある。篠崎 槩撰「家君小竹先生行状」（竹林貫一編『漢学者傳記集成』所収）によれば、「小竹人と為り濶達洒落、軀幹肥大、大声にして細語を喜ばず。園宅は必ず明豁清浄なるを欲し、一切簾帷を用いず。家を治むること寛にして法あり。衣服飲食は一に質素を貴び、凡て事は皆平易明白なるを好み、大だ奇僻を惡めり。……蔵書の富、三島の伝うる所を并せて万卷に上れり。」

したがって小竹の家に入りする天下の名士はすこぶる多く、頼山陽（一七八〇〜一八三二）のごときも菅茶山とこの小竹の温情によって、はじめて文壇に活躍することが可能となったのである。

「山陽が最初に転がりこんだのは大阪の篠崎家だった。周匝の眼は、この親不孝者、そして今は彼を救ってくれた師茶山にさえ背いた人物に対して冷たかった。彼の父の友人たち親戚たちも彼との面会を拒絶したくらいである。」

そのなかで初対面同様の小竹だけは彼を理解し、一生を通じて彼を庇護し、弁護しつづけた。そしてその厚情は山陽の死後まで変わらず、彼は遺児たちの面倒をも見続けた。また山陽が京都で最初の弟子とした後藤松陰を小竹は婿としたが、この小竹松陰の線が中心となって、山陽歿後の頼家は運営されて行くのである。

要するに小竹は、山陽にとっては最良の友であった」(中村真一郎『頼山陽とその時代』中央公論社 昭和四十六年六月刊)、

もちろん菅茶山が上坂しても滞在するのは小竹宅であるし、豊後の儒者日出の帆足万里や日田の広瀬淡窓との交際も浅くない。もともと小竹の実父は豊後の出身であるから、豊後竹田の田能村竹田とも親しく、竹田のごときは三十八で致仕して以来京摂の間で生涯を送った。したがって有名人でなくても同家を尋ねる豊前豊後の人士は多い。

いま試みに篠崎小竹の『交友郷里姓名』水田紀久・森上修・多治比郁校(『大阪府立図書館紀要』館報特集号第二号)によれば、天保六年以降、豊前津田半蔵 中津邸司・豊前森深平 中津家中号竹塙、の名が見え、双豊および諸藩蔵屋敷関係では、

淡州 栗生栄太郎 州本屋敷役人

豊後 帆足熊太郎 臼杵屋敷小笠謙之助便

豊後 杜甚左衛門 号荊田

豊後 満徳寺 豊後岡大会師旧里。岡留守居野殿宗右衛門へ剣菱一丁出ス 正行寺雲善院より

土佐 今西全助 土佐屋敷岡本退蔵便

豊後 小山田久龍 豊後今在家浦

豊後 小川弘蔵 日出人 下帷玉沢町一味庵同伴被訪

高松 高尾弥太郎 大坂屋敷 吉本栄八の便

府内 谷口総助 府内屋敷 江戸 広瀬謙吉ノ便

唐津 田林東藏 藏屋敷 山越慎平
長府 内藤十兵衛 屋敷役人
備後 北条親助便 藏屋敷 川崎初右衛門
宇和島 高木野助 藏屋敷住人 長山房次郎便
江戸 島田屈之助 江戸劍客而有文雅（中津藩出身、福沢百助の友人）
豊後 麻生多三郎 八坂本庄ノ人 秋吉雲桂ヲ伝書 他出不遇 帆足門人
同 宇都宮健哉 帆足門日出ノ人
土州 田村立真 藏屋敷島田清藏へ出すへし
長州 日野貞庵 藏屋敷 徳田喜右衛門
岡 島清七郎 岡藏屋敷 八木偉三郎ノ便
豊前 正行寺 豊前古城 字佐永弘出羽守ノ便
備後 糸井弥六郎 強二事 福山ノ人 藏屋敷瀬尾楠右衛門へ返事可出事
伊予 佐藤孫助 宇和島屋敷御留守居
長崎 坂本周鼎 日出ノ人亦 長崎ヨリ来訪購唐墨及〔杯〕同日
岩国 田中仁右衛門 岩国邸司
同 藤井安兵衛 同 役人
同 渡辺吉兵衛 同

同 豊島蘆右衛門 同

豊後 米屋三右衛門 大市 属碑面 三月初

同 山田孫七 杵築人 佐渡屋直藏親属のよし 属碑面 ○竹沢福岸持参

日隈彦助 広瀬久兵衛同伴

日田 荒木吉次 同上

右のうち中津藩森深平は百助の『杲育堂詩稿』作品番号十七の「己卯十二月、山君彝ともと共に森君を訪ね、則ち分ちて韻徴を得たり」の「森君」の可能性が強い。広瀬謙吉は『淡窓全集』下巻所収の「広瀬氏略系譜」に宗家第五世三郎右衛門五男謙吉 名謙、字吉甫、号旭荘と記載される詩名一世に響いた広瀬旭荘である。広瀬久兵衛は次男ながら宗家を継ぎ、一族の経済を支えた人物で、長男求馬、名建、字子基、号淡窓は咸宜園の塾主、『遠思楼詩鈔』『淡窓詩話』の著者である。

その『遠思楼詩話』の巻頭には天保六年乙未春の浪華 篠崎廻 撰並書、昭陽亀豆撰、帆足万里撰の三序が掲げられ、中央文壇においては小竹のみがこの著名な詩集を飾っているのである。

降って嘉永二己酉歳発兌の『撰西六家詩鈔』を見てもその巻一は小竹斎近稿を以て占られ、巻二が淡窓、巻三が草場珮川、巻四が後藤松陰、巻五が旭荘、巻六が坂井虎山である。後世は知らず、当時においてはもっとも重視された詩人であったといえよう。

『小竹斎詩抄』全五巻は安政七庚申年三月に三都の江戸須原屋茂兵衛、京都勝村治右衛門、大坂河内屋喜兵衛以下十七軒の書店から共同で発賣された。かれは学派の別を越えた交際を大塩中斎(平八郎)とも持っており、巻の一の「啐

後放歌」中には、「子起は廉潔の吏、楽みて貧儒と偶たり、豪蕩禮法に外れ、酔いて獅子吼を発す」の句があり、また卷二には「子起の宅にて繁を食くい、前韻を用いて戯たはれに賦す」の詩もある。子起は号は中斎、通称は平八郎の字である。この点『大阪市史』第二の「小竹と中斎とは全く交無く」は誤りである。

(六)、福沢百助・中村栗園・野田笛浦

福沢咸、字は少山、号は百助、子善ともいった。中津藩学進修館に学んだ。文化十一年八月、二十三歳のときに父兵左衛門より備後菅茶山の塾に遊学に付学資拝借の願が出たが前例がないから聞届けられなかったとの記事がある。(石河幹明著『福沢論吉伝』一卷)

百助はその後豊後日出の帆足万里の塾に学び、『帆足万里全集』上巻にも、『帆足先生文集』卷三に「福沢生に与う」「子善に与う」の両文が、『西嶋先生餘稿』上に「福沢生酒を恵まる」の絶句が、『西嶋先生餘稿』下に「子善に与う」があつて万里がその詩文の才を高く評価した弟子である。自然、百助の交際範囲には万里塾の同門が多い。中村栗園として大坂において詩文の交があつた日出藩儒関子克がそれである。子克は帆門高足十人の一人である。

万里の詩文論は『修辭通』および『肄業餘稿』に尽きている。いずれも百助の旧蔵書として臼杵図書館に現に架蔵されている。蔵書の詳細は拙稿「臼杵図書館蔵福沢先生遺籍解題初稿」(『史学』第四十九卷第二・三号)で承知されたい。

中村栗園も『帆足万里全集』上巻の巻頭「帆足万里先生小傳」に高足十人の一人として承げられ、百助と交際もつとも親密な人物である。すなわち「中村栗園、名和、字子蔵、通称和蔵、晚二半仙子ト号ス。豊前中津ノ人。初メ広瀬淡窓ニ学ヒ、去テ先生ノ門ニ入り、更ラ亀井昭陽ニ学ヒ、又来リテ先生ニ師事ス。家貧ニシテ学資給セス、常ニ野菜ト雪

花菜トヲ食ヒテ苦学ス。後チ上国ニ遊ヒ、篠崎小竹ノ推薦ニ依リテ水口藩ノ儒員トナル。」

維新前後に水口藩家老・藩主が知事になるに及んでその大参事を勤め、明治十四年十二月死去した。その子息中村鼎五輯の『栗園詩稿』（水口 藪音治郎 昭治十七年十月刊）の「先考行述」に「世々奥平侯に仕え、父を片山東籬、母神尾氏という」（原漢文）とあるが、「世々奥平侯に仕え」という個所は事実ではなく中津の商家の出身である。明治以降も続いた土農工商の階級意識に従っていわゆる系図を飾ったものであろう。

市民社会の一定の成熟があり、町人たることに誇りを持っていた大坂町人にはこういうことはあまりない。山片蟠桃のごときは富豪升屋の番頭であることから、その身分をもじって蟠桃の号で著述活動を行っているくらいである。蟠桃も懷徳堂の中井竹山・履軒の弟子、近ごろ宮内徳雄氏の手で『草稿抄』（和泉書院 昭和五十五年一月）が影印刊行され、その本格的な漢詩文の才を証明している。

栗園の子息鼎五の「先考行述」について続けよう。「既にして慨然として上国に遊ばんとし、単身舸に乗り、大坂に至り、藩邸の吏福沢某の家に寓せり。将に贅を篠崎小竹の門に執らんとするも、貧にして束脩もといを行る能わす。文を作りて情を陳べ、扇子一握を持ちて以て謁せり。」

この一文中の福沢某が百助を指すことはいうまでもない。『福翁自伝』ではこの辺の事情を「ところが私の父は決して他人を軽蔑しない。たとえば江州水口の碩学中村栗園は父の実弟のように親しくしていましたが、元来栗園の身分は豊前中津の染物屋のむすこで、いわゆる素町人の子だから、藩中士族はだれも相手になるものがないけれども、私の父はその人物を愛して、身分の相違を問わずたいそうていねいに取り扱うて、大坂の倉屋敷ぐらの家に寄寓させて、なお種々に周旋して、とうとう水口の儒者になるように取り持ち、その間がらというものは真に骨肉の兄弟にも劣らず、父の死

後、私の代になっても、栗園先生は福沢の家を第二の実家のようなあんばいにして、死ぬまで交際していました。」

栗園の著作中、もっとも広く世に行われたのは『栗園文鈔』三卷 萬延紀元夏六月 江戸 須原屋茂兵衛 山城屋佐兵衛 大坂 河内屋茂兵衛 藤屋禹三郎 京都 林芳兵衛 越後屋治兵衛発行）であろう。その下巻に「福沢氏を哭し、詩を以て祭文に代う」の長詩がある。同書は見返しに「諸家合評 中清堂藏梓 安政庚申新雕」とあり、名家の批評が頭注として入っている。すなわち、「小竹曰く、肺腑ふく自り出づ。明人に似ず、動もすればすなわ韻辭情に勝れる有り」といっている。淡窓門下の恒遠醒窓、号は轟谷は「轟谷曰く、真に是れ哭詩なり」といい、「又曰く一對頗る妙」の評語を「公に奉じては裨益すること多く、閑を偷みては暗喞を事とす。文を屬つりては綺語を屏しそけ、詩を賦しては瑰奇を厭いぬ」の句に加えている。

以上によって百助、栗園、小竹の間になんらかの交渉があったのはほぼ明かであるが、小竹の文化十三年より天保五年に至る交友手控帳『不可忘』および『小竹齋詩抄』にも百助の名はなく、また百助の詩文中にも小竹の名はない。前出の「大阪の漢学」中の「篠崎小竹」の項の執筆者北村学氏は、中村栗園を小竹の門人として取扱っている。いずれにしても小竹に栗園を紹介するに際し、百助はなんらかの役割を果していると思われるのである。

野田笛浦に関しては、問題は一層微妙である。『福翁自伝』に「野田笛浦という人が父の親友で、野田先生はどんな人か知らない。けれども山陽を疏外して笛浦を親しむといえは……」とあるが、この個所は母の阿順の平常語っていた事実の反映であるはずである。現在までのところ百助の詩稿・文稿にも、笛浦の『海紅園小稿』一卷（石川治兵衛 明治十四年七月刊）にも『笛浦小稿』二卷、『得泰船筆語』二卷にも兩人の交際を示す詩文を発見していない。笛浦は丹後田辺藩儒、朱子学者古賀精里の弟子である。したがって混沌社、梅花社系の大阪の学者・詩人とも交際があり、『小

竹齋詩抄』にも笛浦の批評が頭注として掲げられている。笛浦の名は交友手控帳にも載っているから、小竹宅へも出入りしていたのであろう。笛浦と百助が知りあったのは、この上坂の機会ではあるまいか。

(七) 福沢百助詩文集と大坂蔵屋敷生活

『杲育堂詩稿』の作品番号 29 と 30 とは大坂赴任の途中の詩、文政癸末（文政六年、一八二三、三十二歳）の作品 31 「梅に題す」から以降がほぼ大坂時代の作品である。百助は文政五年四月、中津において阿順と結婚したが、その秋には大坂へ単身赴任した。その蔵屋敷の「春日」を詠んだ作品 34 を挙げてみよう。

詩思は緒多きも章を成さず

鈎かぎもて疎簾あを上げて夕陽に對す

一陣の狂風何処よりか起り

檣を隔てて吹き送る百花の香

孤枕寒窓細雨斜なり

蕭然たる環堵は僧家に似たり

東君も若かず子の無事なるに

開くこと遍ねし桃花又た李花

連作の前詩は晴の日の堂島川畔の夕景であり、後詩は春雨の日の状況であって、もとより一日の光景ではない。作者は中津藩蔵屋敷の自室にいて、花の香に、こぬか雨に、わが無事の日々を見つめている。愛する妻も故郷に残したままであるから、よけい僧家のようなおもむきが強まろう。

(作品46) 「除夜の作」

識らず東君の比隣に在るを

喧嘩して争い走るは市頭の人

請う見よ 梅柳の都すべて無事なるを

未だ晝鐘の到らざるに先づ春に入る

大坂の大晦日の夜の光景を活写する。この日すでに公務から解放されているのであろう。街角で見る梅も柳も常に変わらず、ここには早くも春が来ているのに、往来する人びとは借金の取立てのためか、殺気だっている。商都大坂の喧噪を覚めた眼で見つけている作。

(作品50) 三月二十八日、「臨高亭に上り、櫻花と牡丹まぎとの方まに開くみを看、依って一絶を賦す」。臨高亭は、堂嶋の室谷氏の別荘なり。

怪む底なの園林か春を占断するや

桜花方に牡丹と共に新らし

東君若し王公の號を許さば

伯仲の間 孰いづれか即ち真なる

堂島に別荘を営む室谷氏は大坂の豪商のひとりである。蔵役人は当然ながら大坂の上級町人との交渉が多い。これは蔵役人にとって楽しいことよりも、心労の絶えない公務の一面である。百助詩文には、十九世紀初頭の大坂の雰囲気そのまま今日に伝える名作にすこぶる富んでいるのである。

(これは昭和五十四年度学事振興基金研究補助による研究「豊前・豊後および大坂の学問と福沢百助」の報告の一部である。)

註

- (1) 揖斐 高氏は「江戸の漢詩人」(『江戸文学と中国』江戸シリーズ4 毎日新聞社 昭和五十二年二月刊)において、さらに「秋田藩の吉田謙齋」を蔵屋敷勤務の混沌社同人として挙げている。謙齋は長沢規矩也監修・長沢孝三編『漢文学者総覧』に諱は里美、生地を羽後、歿年を寛政7年、享年52、師を入江南溟・武田梅龍とし詩人と規定する。
- (2) 前述の武内義雄の「懐徳堂と大阪の儒学」にいう。「贅庵名は誠之、字は叔貴・贅庵と号し忠誠と称した。元禄六年播州竜野に生まれたが十四歳のとき父とともに大阪に來たり住み、十六歳のとき父命に従って、伊予大洲藩の蔵屋敷留守居、岸田源之進の養子となったが、源之進が退けられるに及んで、再び本姓に復して大阪に來住し、(三宅)石庵に従って一意専心学問に従事した」。

(3) 『史学』第四十九卷第二・三号「臼杵図書館蔵福沢先生遺籍解題初稿」

「帆足万里 修辞通 一冊写本 24 cm × 17.8 cm

巻末に「文化十二年乙亥写之」とあり、「青柳堂」名入野紙。

豊後日出の大儒、帆足万里（一七七八一—一八五二）の漢詩文を作る上での実践的な理論書。「復文起稿」の教えに特色がある。「初学者はまず叙事を学び、ついで議論に入るべきであると説く。和漢の大家を批評して筆鋒きわめて鋭い。」万里は徂徠と東涯には同情的である。豊前・豊後では一般的に徂徠・東涯および折衷学の系統が化政・天保・幕末において強い。